

「世の光、イエス」

ヨハネによる福音書 8章 12-20 節

ヨハネによる福音書は、7章から仮庵の祭りでの出来事が記されています。仮庵の祭りとは、エジプトの奴隷であったイスラエルの民がエジプトを脱出し、40年もの間、約束の地を目指して荒野を放浪した時代の神さまの守りと導きを想起する祭りです。

この祭りには欠かせない二つの儀式がありました。一つは、神殿のそばにあるシロアムの池から水を汲み、神さまに捧げるということです。もう一つは、祭りの最初の日の夜から祭りの間中、神殿に立っている四本の大きな金の燭台に火を灯すということです。この燭台の光は、神殿だけではなく、エルサレムの町全体を照らすほどのものであったと言われています。

荒野の旅において、神さまの守りと導きを象徴するものの一つは水です。人は水なくして生きていくことは出来ません。イスラエルの人々が「飲み水がなくて死にそうだ」とモーセに訴えた時、神さまは岩から水を出す奇跡を通して彼らを生かしてくださいました。イエスさまは、そのことを踏まえて、「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい」（ヨハネ 7: 37）と叫ばれました。

それから荒野において、もう一つ大事なものは光です。イスラエルが荒野を旅した時、主なる神は、昼は雲の柱、夜は火の柱によって人々の行くべき道を示されました。この祭りにおいて、燭台はその火の柱を象徴しています。このような状況でイエスさまは、「わたしは世の光である。」「わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」と言われました。燭台の上の輝く炎の光になぞらえて、「あの光を見てみなさい、わたしは世にあってあの光のようなものです」と言われたのではありません。「わたしこそ世の光である」「わたし以外に光りはない」と宣言されているのです。

しかし、人々はこのことを理解しません。イエスさまに対して敵意を持っていたファリサイ派の人々は、「あなたは自分について証をしている。その証は真実ではない」と激しく否定するのです。

ヨハネによる福音書において、イエスさまが世の光とされているのに対し、世は闇とされています。では、世が闇であるとはどういうことでしょうか。私たちの人生に様々な悲惨があるということでしょうか。確かにそれも世の闇であるでしょう。けれども、ここでの闇とは、根本的には、私たちが光を理解しないということです。世に真の光が来られており、その方が天の父の下から来た光としてご自身を証しているのに、その光を理解しないということです。イエス・キリストがご自身を光として示されれば示される程、私たちの無理解、私たちの闇も明るみになるのです。

「世の光」は、「世を照らす光」であると同時に「世を裁く光」でもあると思います。私たちは、光を求めると同時に光を恐れます。光は私たちの暗い部分、罪の部分をも否応なく照らし出すものであるからです。光は裁きを伴っているのです。

この8章の最初には「姦通の女」と題される話がありましたが、この話こそまさに、イエス・キリストが光として来られたということ、それは裁きと救いを同時にもたらす光であったということを示しているのではないのでしょうか。イエスさまは、「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」(8:7)と言われました。この言葉は、彼らの内面の暗い部分を明るみに出す裁きの力を持っていました。しかしイエスさまは最後に、この女性に「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない」(8:11)と言われます。これはイエス・キリストの言葉が、裁きとしての光で終わらず、その向こうに道が開けていることを示す光であったことを示していると言えるでしょう。

けれども、この女性を裁かれなかったイエスさまご自身は、このあと、十字架の上でご自分の命を投げ出されました。この女性の身代わりとなって、ご自分が裁かれたのです。ご自身の命まで投げ出して、大罪を犯した自分を生かそうとしてください。その主イエスを見た時、この女性は、心の底から自分の罪を悔いたのではないのでしょうか。このことを知るからこそ、私たちは今、自分は、こうして命の光に生かされているのだ、と分かるのです。

イエス・キリストは、暗闇の中にある者たちに命を与えるためにこの世へと来られて、十字架と復活によって闇に勝利してくださった真の光です。私たちを導く命の光として輝いてくださっているのです。